

本人が関わりを拒否する場合の対応について

以下は、平成 23 年 12 月に報道された事件の顛末です。この事例を読んでみて、特に対象となる本人が周囲との関わりを拒否する場合の対応について、これまでのご自身の体験を振り返りながら話し合ってみてください。

(新聞記事) A 市・77 歳の母と障がいをもつ息子が病死

A 市の住宅で平成 23 年 12 月、2 人暮らしの母親 (77) と重い障がいがある息子 (44) が相次いで病死していた。

警察によると、息子が通所していた福祉施設の職員が、2 日続けて母親が電話に出ないのを不審に思い、昨年 12 月初旬に自宅を訪問。トイレの窓から中をのぞいたところ、あおむけで倒れている息子を見つけ、警察に通報した。

駆けつけた警察官が、台所で倒れている母親も見つけた。解剖の結果、母親の死因は解離性大動脈瘤破裂、息子は肺気腫などによる呼吸不全。母親は死後約 1 週間、息子は前日に死亡したとみられる。

警察署によると、息子は小児まひに加え、知的障がいもあり、1 人で歩いたり食事をすることができなかった。息子が昨年 9 月まで通所していた福祉施設によると、昨年 7 月に父親が病死した後、同施設に通う回数が減り、同年 9 月には母親から「通うのをやめます」と電話で連絡があった。母親は市役所の職員に「夫を亡くして忙しくなり、息子を朝起こして施設に通わせるのが大変になった」と説明したという。

施設では、息子が通わなくなった後も、不定期に電話をかけたり安否確認をしながら、通所の再開を勧めていたが、母親は「困っていることはない。大丈夫」と断り続けたという。施設や市役所の関係者は、「『困っている』といってくれたら支援できたが、『大丈夫』といわれると介入のしようがない。本当に悔しい」と唇をかんだ。

この母親と息子は 2 人暮らしだったため、民生委員の訪問の対象外だった。

(※記事内容については、加筆等の編集の上、掲載しています)